HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第二部　部局史.　薬学研究科・薬学部
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 699-727
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28181
Type	departmental bulletin paper
File Information	hokudai125yr_tsuusetsu_699.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

薬学研究科・薬学部

第一章　医学部薬学科創設と薬学部昇格

第一節　明治から昭和に至る北海道内の薬学の状況

北海道における薬学教育は札幌薬学校をもって嚆矢とする。一八八九（明治二二）年五月に開校されたこの学校は『北大百年史』に紹介されているように、勝山忠雄を校長とする二年制の薬剤師養成学校であったが、二年後には廃校になった。十数年後の一九〇五（明治三八）年五月、同じ校名の「札幌薬学校」が山形卯三郎ら薬業界の支援を受けて設立された。林綏七郎（当時札幌病院薬局長）が校長に就いた。修業年限を二カ年とする薬学校であったが、卒業生を送る前に廃校に至った。続いて、北海薬学校が一九一〇（明治四三）年九月に設立された（修業年限二年）。岩本勝次郎なる開局薬局の薬剤師が開校し、自ら校長も兼ね、修了生も世に出した。しかし、この薬学校も一九一三（大正二）年一月頃には閉鎖となった。こうして、いずれの薬学校も短命に終わったが、原因の大半は経営難にあった。

たび重なる挫折の歴史にもかかわらず、北海道にも「薬学校が欲しい」との地元の強い要望はその後も連綿と続く。時は流れて昭和の時代。またもや薬学校設立の動きが二度にわたって起きた。残念ながら、いずれも幻に終わるのであるが、ひとつは一九三二（昭和七）年の私立札幌薬学校である。これは入試実施の段階で中止となった。もうひとつは北海道立札幌医科大学薬学部の設置計画である。一九五一（昭和二六）年の道議会では、その設置が議決されたにもかかわらず、道の厳しい財政状況のあおりを食って立ち消えになってしまった。以来、北海道での本格的な薬学教育機関は、北大医学部薬学科の誕生、一九五四（昭和二九）年まで待たねばならなかった。札幌薬

学校の開校以来およそ七〇年、道民の念願が叶うまでには実に長い道程であった。

一九五二（昭和二七）年に北大の教授から声がかかり、北海道薬事薬業関係者により北海道大学医学部薬学科設立期成会（以下、期成会）が結成され、進等が中心になり、北海道薬剤師会大西哲雄会長、秋山愛生館社長秋山康之その誘致と資金的援助が行われた。すなわち、この期成会は、中央に強力に働きかけたのみでなく、全道の薬局、薬店をはじめ薬業界から多数の浄財を集め創設期の薬学科に寄付もした。

大西哲雄道薬会長は発起人代表挨拶の中で「昭和二六年第一〇国会にては時運に従い薬事法の改正あり、所謂医薬分業確立し、来る三〇年より実施のことは我が国保健衛生上数段の前進を確かとせり、然るに時偶々北大医学部改築の議あり、この機会に政府当局又薬学科設置を認容の気配をしめさる。（中略）殊に医薬品のごとき原料の豊富は、将に世界的雄飛を約束されるもの数種あり、その前途真に洋々たるものありて、往時のごとく本州依存は、本道の特殊事情に鑑み、誠に策を得たるものにあらず、この北大医学部薬学科設置の絶好機運に吾人は、総ゆる努力を捧げ難関を突破し、将来の想をここに致し、これが完成を期せんとするものであり、江湖各位の御賛同を翼う次第であります。」と述べており、当時の時代背景が伺える。

期成会発起人は、全道各地薬業組合、同卸売業者、道薬剤師協会理事、幹事、支部長、代議員等からなり、発起人会には来賓として島善鄰北大学長、安田守雄医学部長、杉野目晴貞理学部長、林平三郎北大病院薬局長、稲垣是成道衛生部長、谷本友市医学部事務長等の名が記されている。こうした各方面の努力により、一九五四（昭和二九）年四月に薬学科（完成時七講座、学生定員一学年四〇名）の設立を見た。

第二節　医学部薬学科創設と整備

新設薬学科の主任教授に岐阜薬科大学教授赤木満洲雄が指名され、一九五四（昭和二九）年二月現地視察に引き続き、四月に着任した。講座は薬化学が初年度に、二年度に薬品分析化学、生薬学、三年度に薬品製造学、衛生化学、最後に薬効学、薬剤学が認可され、順次教官人事が進められていった。

一九五五（昭和三〇）年に入り教授候補者等も決まり、五月に赤木教授（衛生化学）の他、水野義久（薬化学）、木村道也（薬品分析化学）、三橋博（生薬学）が札幌に集まり、当座の研究室、学生の受け入れなどについて協議した。七月に二講座認可に伴い、職員が相次いで着任し、医学部より割愛された施設に分散して、教育・研究用資材が運び込まれ、整備されていった。一九五六（昭和三一）年に伴義雄教授（薬品製造学）が着任した。教員は皆二十代、三十代と若く、人数も少なく、薬学科創設の意欲に燃えた者ばかりで全員協力して建設作業に当たり、講座の枠を超えた「教室会議」と呼称する会議で、それぞれ役割を決め何でも相談しながら、薬学一家的纏まりで整備作業が進められた。十月に一期生（男子二八名、女子一一名）が教養部から移行してきた（写真1）が、若い職員とは年齢差もなく、不自由な生活にもお互い理解し合い、ソフトボールやバレーボール、モーラップでのキャンプや樽前山登山など、レクリエーションを通じてお互いの連帯意識を高め、教養を培いながら創設期の薬学科の建設が行われた。一九五八（昭和三三）年に残る薬効学、薬剤学の二講座が認可されたが、主任教授の発令が遅れ、翌年四月に林平三郎（薬剤学）、岩本多喜男（薬効学）の二教授が着任した。

一九五八（昭和三三）年四月に大学院薬学研究科が認可され、最初の修士課程進学者に七名を迎えた。学年進行に伴って、次々に新設される講座のための教室を求めて、赤木教授は毎年、医学部内を頼み回らねばならなかった。幸いにも、附属病院の西北隅にある隔離病棟を譲り受けることになり、これに生薬学・衛生化学・薬剤学・薬効学

の四講座が移り、南に薬化学・薬品分析化学・薬品製造学の三講座が残り、キャンパスの南北に分断された薬学科が形成された。その後一九六五（昭和四〇）年に薬学部が設置され、薬学部本館第二期工事が一九六八（昭和四三）年に完成し、すべての講座が同じ建物に収容されるまでには、実に一〇年の歳月を要したのである。

一九六〇（昭和三五）年三月には第一回の大学院修士課程修了者を送り出すとともに、四月には最初の博士課程進学者を迎えた。一九六一（昭和三六）年七月、薬学科の陣容が一応整ったのを機会に、赤木教授（北海道薬剤師会会長）が実行委員長になり、関係者一同の協力により札幌での初の大会（日本薬学会第八一年会）を成功させた。

かくして医学部薬学科と大学院薬学研究科薬学専攻の創設期を終え、一九六五（昭和四〇）年四月の薬学部発足に至るのである。

写真１　薬学科第一期生移行式の後（1955年）

第三節　薬学部――誕生と成長――

薬学科発足の一〇年間に北の薬学研究基地としての存在が確固たるものになった。さらなる飛躍のために薬学部昇格の機運が高まり、一九六五（昭和四〇）年四月一日に本学における一一番目の学部として薬学科と新設の製薬化学科の二学科からなる薬学部が誕生し、初代学部長に赤木滿洲雄教授が就任した。製薬化学科の新設は、従来の薬学の研究と教育が有機化学に偏重していたことへの反省と新たな学問潮流への対応を考えてのことであった。一九六六（昭和四一）年四月に薬品合成化学講座と薬品有機化学講座が増設され、金岡祐一教授と池原森男教授が発令された（いずれも本学助教授より昇任）。翌年には微生物薬品化学講座と薬品生物化学講座が増設され、石本真教授（東大理学部助教授より昇任）と石井信一教授（東北大理学部助教授より昇任）が就任した。さらに一九六八（昭和四三）年四月一日には植物薬品化学講座と薬品物理化学講座が増設され、米光宰教授（本学助教授より昇任）と浜口浩三教授（関西学院大学理学部教授より転任）が就任した。この製薬化学科の教授人事の特徴は、生物化学分野の充実を目標として薬学出身者に限ることなく優れた人材を広く全国から集めたことにある。このことは以来、薬学部が北大における生物化学研究の重要な拠点の一つとなる基礎を作った。

薬学部誕生の翌年一九六六（昭和四一）年九月には学部校舎の新築工事が始まり、一九六七（昭和四二）年七月に東半分の新築工事が完成し、薬化学、薬品合成化学、薬品製造学、薬品有機化学、薬品分析化学の五講座が移転した。さらに一九六八（昭和四三）年六月にすべての新築工事が完了し、名実ともに北の創薬研究基地が完成した。同年停年退官した赤木教授の後任に小山次郎教授（京大薬学部助教授より昇任）が就任した。さらに翌年には池原教授が大阪大学に転出し、後任に上田亨教授（本学部助教授より昇任）が発令された。

当時、サリドマイド事件を初めとした薬害事故や高度経済成長の負の遺産といえる公害訴訟などが大きな社会問

題になっていた。こうした社会変化に対応できる薬学者を養成するために、薬学部発足一〇年間に四度もカリキュラムの見直し作業が行われた。

大学院修士課程の修了者は一九七六（昭和五一）年度までに二八三名（内女子三五名）で、また薬学博士の学位を授与されたものは課程博士七五名、論文博士九二名に達している。

研究面では、一九六五（昭和四〇）年から一九七五（昭和五〇）年に至る一〇カ年に六〇三編の原著論文が公表された。こうした業績が評価され、数多くの教官が各種の賞に輝いている。日本薬学会が優れた研究者に贈呈する学会賞を、一九六三（昭和三八）年に伴義雄、一九六五（昭和四〇）年に三橋博、一九七一（昭和四六）年に池原森男の三教授が受賞した。その他、若手研究者に与えられる日本薬学会奨励賞を八名が受賞した。また、一九七三（昭和四八）年には木村道也が日本分析化学会賞を受賞した。一方、学会活動としては、日本薬学会第八一年会が一九六一（昭和三六）年に、第九〇年会が一九七〇（昭和四五）年に北大キャンパスにおいていずれも成功裡に開催された。

一九六九（昭和四四）年、全国の大学を吹き荒れた大学紛争の嵐が本学にも押し寄せた。大学本部や文系四学部、教養、工学部校舎が相次いで封鎖され、大学の機能が麻痺した状況下でも、本学部は、教官・職員・学生の協力のもとに、校舎封鎖から免れ、研究の灯火を絶やすことはなかった。

第二章　教育・研究の改革と発展

薬学部二〇周年の記念式典が一九七四（昭和四九）年に行われ、この時期以降、薬学部の設備・施設などが、かなり充実され研究・教育の発展に大きく寄与した。

一九七六（昭和五一）年に薬用植物園実習棟が新築落成し、同年薬学部の附属研究施設として「薬用植物園」が設置され薬学の教育・研究の中心的施設となった。この初代園長に三橋博教授が就任している。また、薬学部設立当初から薬学部の研究に重要な役割を果たしてきた元素分析施設は、全学的にも大きな貢献をしてきたことから全学の共同利用施設に指定された。一九七九（昭和五四）年に北海道大学機器分析センターが学内共同教育研究施設として認められ、薬学部に隣接して廊下で繋がれた三階建ての建物が建てられた。その中には元素分析施設を始めこれまで薬学部の中央施設委員会に属していたＮＭＲ（核磁気共鳴）分析、ＭＡＳＳ（質量分析）、アミノ酸分析等がそのセンターに移り、新しい形の全学施設として出発することになった。その初代センター長は石井信一教授が務めた。この分析センターは全学の施設として更に大型機器が充実され、全学の研究の中心的存在となっている。更に一九七八（昭和五三）年に実験動物管理センターが新築落成している。

一九七九（昭和五四）年八月に三橋博教授を組織委員長として日本薬学会第九九年会が北海道大学を会場として教官・学生が一体となって協力し、成功裡に開催された。また一九八四（昭和五九）年十一月に当学部三〇周年記念の祝賀会が同大学会議室で盛大に開かれた。この年、伴義雄教授は「インドールアルカロイドの合成研究」と題した研究成果において日本学士院賞を受賞している。当学部の研究面における貢献を強く印象づけた。

この後数年間にわたって当学部の教授が相次いで退官され、否応無しに歴史の転換期を知らされた。

一九八三（昭和五八）年三月に薬学部創設以来有機化学の教育と研究に打ち込み、多くの研究者を育てた水野義久教授が、また一九八五（昭和六〇）年三月に同様に若くして初代教授として北海道に移り、薬学の教育・研究の中心的存在として活躍してきた木村道也教授、伴義雄教授、三橋博教授が同時に停年退官した。ある意味ではこの年を機にこれまでの薬学部の創世期としての歴史の幕を閉じたことになる。後任教授として、薬化学講座には薬品有機化学講座から上田亨教授が移り、薬品有機化学講座の後任としては本学部の一期生である大塚栄子教授が初の女性教授として就任した。大塚教授は恐らく国立大学の薬学部に女性教授が誕生した最初の例ではなかろうか。生薬学講座後任として金子光助教授が昇任した。また一九八六（昭和六一）年に、若手の鎌滝哲也教授（薬品分析化学講座）、柴崎正勝教授（薬品製造学講座）が新たに赴任した。一九八六（昭和六一）年に薬効学講座を担当していた宇井理生教授が東京大学に転出、その後任として一九八七（昭和六二）年に野村靖幸教授が就任した。一九八八（昭和六三）年に微生物薬品化学講座の石本真教授が停年退官し、翌年若手教授として有賀寛芳教授が就任した。また、薬品物理化学講座を担当してきた小畠陽之助教授が東京へ出張中急逝、深い悲しみを覚えたのもこの年である。その後任には加茂直樹助教授が就任した。一方、生薬学講座の金子光教授が一九八九（平成元）年に退官し、ここにも若手教授である本学出身者の小林淳一教授が三菱生命化学研究所から転入してきた。一九九〇（平成二）年に本学に生化学を導入した石井信一教授（薬品生物化学講座）も退官し、横沢英良助教授が昇任した。ここに当学部の殆どの講座は若手教授に代替わりし、これから後の新たな歴史を築くことになった。

一九八六（昭和六一）年にカナダのアルバータ大学薬学部と姉妹校となり、その覚え書きを結んだが、一九八七（昭和六二）年にカナダから薬学部長が我々の大学を訪問し、教官との懇談会が百年記念会館で開かれお互いの友好を深めた。一方、この年に本学の伴義雄名誉教授が北海道大学の学長に選出された。このような規模の小さな学部から学長が選出されたはじめての例として全国的に大きな話題を呼んだ。伴学長は北海道大学の運営にあたって

様々な努力をしたが、なかでも触媒化学研究所の廃止に関わる問題に多大な努力を払った。これは幸い最終的には触媒化学研究センターとして改組され、全国組織として新しく出発することになった。その中の精密有機触媒部門が薬学研究科の教育・研究に関わることになり、その初代の教授として若手の林民生教授が着任した。

一九九〇（平成二）年の夏に日本薬学会第一一〇年会が再び北海道大学を会場として大々的に開催された。同年九月、これまで薬学部が発足して以来薬学部のみならず北海道大学の民主化にも多大な貢献をしてきた薬化学講座の上田亨教授が癌のため逝去、深い悲しみを与えた。その後任には本学出身の松田彰助教授が昇任した。一九九一（平成三）年三月には、衛生化学講座の小山次郎教授、薬品合成化学講座の金岡祐一教授が共に退官した。衛生化学講座には長澤滋治助教授が昇任し、薬品製造学講座の柴崎正勝教授が東京大学に転出した。

一九九二（平成四）年に薬学部の改組が文部省から認められた。それまで薬学部は薬学科、製薬化学科と二つの学科を持っていたが、実質的には全く一つの学部として八〇名の学生に対して教育が行われてきた。また、管理部門も全く一つの組織体として扱われてきた。その事実との整合性を持たせることになり、一つの総合薬学科として改組されることになった。その際、生体分子構造学講座が新設されることが認められ、一四講座の薬学部として再出発することになった。新設講座の教授として本学出身の森美和子教授が当たることになった。その結果、本学には全国に先駆け女性教授が一四名の教授のうち二名と言うことになり話題を呼んだ。また、同年十月に薬品製造学講座に橋本俊一教授が赴任した。薬品合成化学講座の後任としては、生命科学を充実するために、上野直人教授が若干三六歳で赴任し（生体機能化学講座に名称変更）、若手教官として学生の先頭に立ち活躍した。

一九九四（平成六）年に薬学部創立四〇周年記念の行事が行われ、十一月二十六日に学術講演会がクラーク会館で開かれた。講師として、本学部卒業生であるロードアイランド大学の清水譲教授（本学一期生）が“1955–1994 and where to go”と題して、また、東京大学を停年退官後、理化学研究所に移った宇井理生教授が「生命を育む情報」

と題して講演を行い、深い感銘を与えた。

また、一九九五（平成七）年に触媒化学研究センターの林民生教授が京都大学に転出することになり、その後任として分子科学研究所（岡崎国立共同研究機構）から若手の高橋保教授が赴任し、これまでと同様、薬学部、薬学研究科の学生の教育と研究に関わっている。なお、森美和子教授は、一九九四（平成六）年に退官した米光宰教授の後任として精密合成化学講座に移り、生体分子構造学講座の後任には、一九九七（平成九）年、薬効学講座の徳光幸子助教授が昇任した。

第三章　大学院の重点化と医療薬学の充実

第一節　縦割り制への移行

一九九四（平成六）年北海道大学では従来の教養課程を廃止し学部一貫教育を行うことを決定した。これは今までの教育のあり方が問われたことになるが、全学的な決定であることから薬学部でもこれに対応することになった。そこで当学部としてどのような学生を求めるかと言うことで連日会議が開かれた。その結果研究者を養成していこうとする薬学部の姿勢を明確に表すことにし積極的に推薦入試を行い、将来大学院に進学したいと考える学生をとることになった。入試制度はこれまでもずいぶん手直しされているが、この年に正式に推薦入試一五名、前期試験四五名、後期試験二〇名（一九九九年に前期試験五五名、後期試験一〇名に変更）と決定した。そして推薦入試に

対する北海道大学薬学部の考え方を高校に伝えるために、教授、助教授が二人一組で手分けをし、新たに作成した高校生向けの学部紹介のパンフレットを持って道内の高校を訪問した。はじめての試みではあったが、この年に一六名の学生（男子一〇名、女子六名）の推薦入試合格者を決定することができた。学生は薬学部に初めから入学したことになり、カリキュラムは以前の教養課程で行われたものの他に、有機化学、物理化学などの専門基礎科目の講義が一年生の最初から行われることになった。また、全教授による「生命科学の最先端」という総合講義が薬学生のみならず、全学学生に開講された。この年から新しい制度下で薬学部が歩き始めることになった。

第二節　薬剤師教育

薬学とは本来、患者に安全で確実な薬物療法を目標とした学問領域と位置づけられる。一言で言えば、患者あっての薬学部である。そのため、創薬を目指した高度な化学と化学を駆使する技術、生体側の分子構造と機能を明らかにする科学、疾患の科学、さらには既に使用されている医薬品の適用法に関する知識と技術などが総合的に求められる。薬剤師国家試験では、これらの総合的な知識を最低限バランスよく修得しているかどうかが試験される。そのため、国家試験では一科目でも規定の点数に達していなければ、たとえ他の科目で満点を取っていても国家試験に不合格となる。

北大薬学部では、未知の科学に対して挑戦的で、高度な研究者の育成のための教育に重点を置いてきた。一方、いわゆる薬剤師として医療現場で働くための教育は少ない傾向にあったが、北大薬学部を卒業した学生の内、毎年必ず何名も薬剤師として道内外に就職している。特に最近は薬剤師または医療関係に就職する学生数が多い（第四章参照）。

北大薬学部のカリキュラムはこの約一〇年間で大きな変遷を遂げてきた。その背景には、一、医療を巡る環境が大きく変化しており、医薬分業が薬剤師の悲願を反映して大きく進展しつつあること。現に処方箋発行率は四〇％を超える勢いとなっている。したがって、患者の疾患と薬物療法の知識は薬学教育にとって必須のものとなってきている。二、医療環境の変化に平行あるいは先行して、薬剤師国家試験の傾向も大きく変化しつつあり、より実践的な知識が求められていること。三、薬学教育六年制の議論も盛んで、薬学教育の内容を十分に吟味しなくてはならなくなってきたこと、などが挙げられる。一言で言えば、「薬学とは何か」が真剣に問われる時代となってきたといえよう。

このような時代の背景があるものの、薬剤師教育は北大薬学部の教官にとっては困難なものである。それは教官自身がこのような教育を受けたわけではなく、全く新規な経験だからである。したがって、薬剤師教育をするにも自前ですべてやることは難しいと考えられた。幸いにも、薬剤師教育の中でも最も重要な、疾患に関する講義は、北大医学部などの先生方の援助を得ながら実施されている。北大では理Ⅰ、理Ⅱのような横割りの教養課程を経て、学生は各学部に配属されてきたが、一九九四（平成六）年よりいわゆる縦割りとなり、現在の学生は薬学部を志望して受験し入学する。横割りから縦割りとなって明らかに学生の意識も変わってきたように思われ、より医療に関心を持った学生が多くなったようである。

一九九七（平成九）年度からは、大学院に各学年四名に限り臨床薬学コースが設置された。臨床薬学コースに入学するには薬剤師国家試験の合格が義務づけられている。このコースの特徴は、病院における半年以上の実務実習があること、修士論文の研究は病院の薬剤部あるいは臨床の研究室で行われることである。開設当初には種々の戸惑いがあったものの、その後徐々に蓄積された経験に基づき大いに改善され実があがっている。将来、先端的な薬剤師がこのコースから生まれてくると期待される。

第三節　大学院重点化

一九九三（平成五）年から、北大でも教育・研究の主体を大学院におくいわゆる大学院重点化が始まった。薬学部も一九九四（平成六）年に栗原堅三学部長が大学院重点化を文部省に打診したが、薬学部の教育年限延長問題を解決することが先決とされ、暗礁に乗り上げた。栗原学部長は古賀憲司東大薬学部長に呼びかけて、現行の四年制で充分な薬剤師教育を行うことを保証するための薬剤師教育標準カリキュラムを作成した。こうした努力が文部省により評価され、薬学部重点化の障害となっていた薬学教育六年制問題が当面見送られる事になり、一九九七（平成九）年に東大、京大の薬学部、翌一九九八（平成一〇）年に北大と阪大の薬学部の大学院重点化が実現した。

大学院重点化に伴って、大学院は二専攻から三専攻（生体分子薬学・創薬化学・医療薬学）になり、一四講座を統合して三つの大講座（一六分野）になった。さらに、医学部附属病院薬剤部を医療薬学専攻の協力講座とした。こうした組織変更にあわせて、九名の教務職員定員を振り替え財源にして、二名の教授と七名の助教授の定員増が実現した。さらに、修士課程の定員が二六名から四三名に、博士課程の定員も一三名から二〇名に増加した。また、従来の講座という名称が分野に変更されると同時に、幾つかの講座では研究実態を反映した分野名に変更した。

大学院重点化の前年の一九九七（平成九）年に、上野直人教授が基礎生物学研究所（岡崎国立共同研究機構）に転任し、翌年、後任に五十嵐靖之教授（米国ワシントン大学准教授より赴任）が就任した。また、一九九九（平成一一）年には栗原・大塚両教授が停年退官した。同年、一九九五（平成七）年に行った外部評価委員による薬学部の点検評価で、物理化学の教育・研究の充実化が指摘されたことも配慮して、新たに構造生物学分野が誕生し、稲垣冬彦教授（東京都臨床医学総合研究所部長より赴任）が就任した。また、二一世紀の薬学教育においては、臨床薬剤学が益々重要視されるものと予想される。そこで、薬学特有の研究分野である薬剤学の強化を図るとともに学部

学生の病院実務実習を支援するために、薬剤分子設計学分野と臨床薬剤学分野を新設し、原島秀吉教授（徳島大学薬学部助教授より昇任）と井関健教授（北大医学部附属病院薬剤部助教授より昇任）がそれぞれ就任した。

本学部の大学院重点化の特徴は教授ポストの増加を抑え、助教授ポストを増やしたことである。これは、大講座制に伴う研究組織の細分化という重点化の弊害を避けるためである。従って、教授一名に助教授二〜三名という分野も誕生した。重点化後の三年間で、助手から昇任した七名の助教授のうち二名が教授として他大学へ転出するなど、人事の流動化というメリットも現れ始めている。しかし、薬学研究科の一層の活性化を図るためには、研究分野あるいは大講座の壁を越えた共同研究を立ち上げることが望まれる。

大学院重点化の概算要求を始めた一九九六（平成八）年度から、老朽化した薬学部本館の大型改修工事が始まった。本館南側に三棟の仮設研究棟が設置され、そこに本館東側の三講座が移転し、改修作業の完了したところへ隣りの講座が移動する仕組みで東端から四期に分けて工事が進み、二年後の一九九八（平成一〇）年三月に無事すべての改修工事が完了した。また、一九九六（平成八）年には本館西側に接続して二階建ての動物舎（床面積約四〇〇平方メートル）も新築された。この動物舎には多様な生化学実験、薬理学実験に使われる水棲動物からマウスまでの飼育室の他に、遺伝子組み換え動物の作成・飼育にも対応できるクリーンルームも設置されている。

こうした大型改修工事により本館は新築同然に蘇ったが、大学院生の増加や大型機器の設置などで研究室が極めて手狭になった。また、大学院や学部教育における演習形式の講義の充実化を図るためには講義室や演習室が不足しており、一九九八（平成一〇）年度から研究・教育棟の新築計画を概算要求事項のトップに掲げて申請している。

また、大学院重点化に相前後して有機化学や分子生物学関係の新鋭機器が設置された。特に、分子生物学の研究機器類はゲノム解析室と顕微鏡画像解析室に集中管理され、効率的な使用を図っている。ゲノム解析室には、イメージアナライザー、ＤＮＡシーケンサー、セルソーターなどがあり、顕微鏡画像解析室には細胞の形態学的な研究に

使われる共焦点レーザー走査蛍光顕微鏡、多目的写真用蛍光顕微鏡、細胞内Ca測定蛍光顕微鏡等が設置されている。

第四章　研究・教育活動の成果

第一節　研究活動の成果

一九九八（平成一〇）年四月に大学院重点化が実現して、学部講座制が大学院講座制に移行した。現在、この大学院重点化体制のもとで、各教官・職員が高度な研究・教育を目指して奮闘している。

本学部の大学院重点化が実現した所以は、各教官の研究・教育に対するたゆまない努力の賜物と言っても過言でないであろう。具体的な数字として、発表された研究論文は、毎年二〇〇編を超え（例えば、一九九七年では学術論文一八二編、著書等六九編、一九九八年では学術論文一九七編、著書等六一編）、他の国立大学の薬学部との比較では、教官一人当たりの論文数がトップの座を占めていることに如実にあらわれている。また、学術に関する受賞では、日本学士院賞（一九九六年、大塚栄子教授）や女性研究者に対する猿橋賞（一九九一年、森美和子教授）をはじめ、各教官が所属する学会の各種賞（日本薬学会の学会賞や奨励賞等）を受賞している。そして、国内の学会活動では、日本薬学会をはじめ、各教官が所属する学会の年会や学術集会等を主催し、研究者のネットワーク作りに向けてのたゆまない努力がなされている。一方、国際交流も盛んに行われ、国際学会への出席も多く（例えば、一九九九年は延べ二三名）、また、国際共同研究も着実に実施されてきた。留学生の受け入れでは、最近の五年間

で、延べ一五名（中国一〇名、ブラジル二名、韓国一名、マレーシア一名、ミャンマー一名）の学生・院生が、高度な教育を受け研究に携わり、母国での活躍を期している。

以上のような高いレベルの研究を支えるべき体制・環境の整備のために、通常の研究費に加えて、一九九五（平成七）年度から毎年、高度化推進特別経費が配当され、また、一九九五（平成七）年度から三年間にわたって特定研究経費の配当、一九九六（平成八）年度に大型特別機械整備費の配当、一九九七（平成九）年度に大学改革推進等経費の配当、一九九八（平成一〇）年度に大学院重点整備設備費の配当がなされ、多くの大型精密機器が設置された。また、研究レベルのバロメーターといえる文部省（学術振興会）科学研究費の採択件数は、毎年六〇件を超え（例えば、一九九八年度は六五件、一九九九年度は六一件）、当該研究領域での高い評価を受けていると言える。また、他省庁研究費、産学連携等研究費、受託研究費、民間共同研究費、あるいは委任経理金等、競争的資金の取得件数にも研究成果が反映されていると言えよう。

教育・研究の充実を期して、一九九二（平成四）年度から毎年、ティーチング・アシスタント経費が、また、一九九六（平成八）年度から毎年、リサーチ・アシスタント経費が配当され、教育・研究を支えてくれる院生に配分されている（例えば、一九九九年度は計四六名）。ますます高度化する教育・研究体制を維持するために、さらなる充実が望まれている。

第二節　教育活動の成果

北大薬学部の薬剤師国家試験の合格率は、この一〇年近く全国の国公私立大学薬学部・薬科大学の中でも常に上位にある。表1に、一九九一（平成三）年から二〇〇〇（平成一二）年度までの国家試験合格率の推移を示す。全

表１　当学部の薬剤師国家試験合格状況の最近10年間の推移

平成	当学部の受験者総数*	当学部の合格率（%）	全国立大学の合格率（%）	全国立大学での順位
3年	104	64.4	69.0	11位
4	99	66.7	62.4	4
5	109	82.6	70.5	2
6	96	64.6	59.7	4
7	111	73.0	57.2	1
8	104	84.6	69.2	1
9	96	79.2	69.0	2
10	108	78.7	64.2	1
11	93	75.3	69.7	1
12	100	86.0	73.1	1

＊旧卒と新卒の合計人数

国国公私立薬学部の総数は四六校（国立一四、公立三、私立二九）であり、国公立大学中では一～二位を、全大学中では一〇位付近の高位を維持している。それ以前の北大の国家試験合格率は全国で最下位から五番以内であったから、如何に大きな変化が起こったか想像が出来る。北大に引き続き、近年国立大学の奮闘が目立った傾向になってきているが、それでも基本的な傾向、すなわち私立大学の合格率は依然高い傾向にある。

北大薬学部の高い合格率の背景には、カリキュラムの改訂や教官の国家試験に対する意識の変化、それに応じた国家試験対策ワーキンググループの活動などがある。初期には医薬品試験法や解剖学の講義の新設、薬物療法学の講義の新設と拡充があり、薬剤師国家試験ワーキンググループによる国家試験の重要性の啓蒙、そして国家試験に向けた補講など、様々な対策が講じられた。以上の変遷を省みると、元々北大薬学部の学生は優秀であり、彼らの能力を引き出すためのカリキュラムの改善と教官の熱意があれば国家試験は困難な壁ではないことが示されている。逆に言えば、適切なカリキュラムの構成と教官の熱意がなければ、いくら学生が優秀でも国家試験は遙か彼方の大きな壁であり続けるだろう。

一方、北大薬学部の学生の就職先の分布は全国の国立大学の中でも

特徴的である。北大薬学部を卒業した学生の多くは修士課程に進学する。学部卒業生約八〇名の内四〇名から五〇名程度が大学院修士課程に進学するが、その数は年を追うごとに、徐々にではあるが増えつつある。学部卒業生の内、就職する学生の就職先には際だった特徴が見られ、最近は医療・保健関係（薬剤師が多い）への就職が急増しており、二〇〇〇（平成一二）年には二三名が医療・保健関係に就職している。大学院修士課程修了者の多く（年によって異なるが約一四〜一五名）は博士後期課程へ進学している。また、臨床薬学コースの学生だけでなく、修士課程を修了してから医療・保健関係に就職する学生も近年増えつつある。学部卒・修士修了者を合わせると三〇名以上の学生が医療・保健関係に進んでいることになる。製薬・化学・食品関係へ就職する学生も多く、教員を含む公務員になるケースも少なくない。大学院博士後期課程の修了者の進路は幅広く、製薬、化学、食品、公務員だけでなく、さらに学術振興会からの奨学金を得てポストドクターになるケース、海外留学するケースなど様々である。

第三節　点検評価（外部評価）

現在、大学は、従来の「象牙の塔」から「社会に開かれた大学」へと脱皮をはかっている。そして、学部・大学院の研究成果・教育成果を、広く社会に向けて発信する努力をしている。

本学部・研究科では、学部創設から一九九〇（平成二）年まで、五〜一〇年の単位で研究業績集の第一〜四集を刊行し、研究の成果を広く世に公表してきた。そして、一九九四（平成六）年に、一九九一（平成三）年から四年間の研究活動に加えて、教育活動、管理運営、施設等の現状をまとめ、自らが点検を行って問題点を明らかにする自己点検を行うとともに、第三者（この時は一三名の国立大学薬学部の学部長）による評価（外部評価）を実施し

た（その内容が『点検評価報告書』として刊行された）。この時の点検評価・外部評価は、北海道大学の学部・研究科では初めての試みであり、本学における方向性を示した点で先駆的であったといえよう。この時の外部評価として、高い研究論文発表数を評価する一方で、北大薬学部としての独自性・特色を発揮すべしとの指摘があった。北大大学院薬学研究科・薬学部としてのアイデンティティをどのように確立するかが、今後の検討課題である。

第二回の自己点検・外部評価が、一九九五（平成七）年から三年間の研究活動・教育活動等の内容をもとにして実施され、一九九八（平成一〇）年に『自己点検・外部評価報告書』として刊行された。この時の外部評価は、薬学領域で著名な一三名の学外審査委員によりなされた。以下に、外部評価の概略を記す。

研究活動――研究活動の実績は、全国の薬学研究科・薬学部では一～三位に位置する等、おおむね高い評価を受けた。そして、今後の研究活動の方向性について、ＣＯＥの大型研究班を組織化できるような超一流の研究の遂行、草創期のような挑戦的・個性的研究の遂行、生物現象を有機化学レベルで理解することを志向した領域の拡充、生物あるいはヒトを全体として観察・解析する研究の遂行などが指摘された。

教育活動――本研究科・学部では、医療薬学教育の重要性を認識し、他の国立大学に先駆けて幾つかの教育改革を行ってきた。その努力がこの数年間の薬剤師国家試験の好成績につながり、医療薬学に関する教育実績について高い評価を得た。今後、基礎教育と薬剤師養成教育とのバランスをどのように維持しながら学部教育を充実させるか、また、修士課程の教育体制を見直し、博士後期課程の学生の質・量のアップを図ることが、重要な検討課題である。

その他――教官選考にあたって、適任者を全国規模で公募し、前任教授の研究教育領域を見直し、出身大学にとらわれない大胆な教官選考を行ってきた。これが、本研究科・学部を活性化してきた一因と評価された。一方、教官年齢構成の若返り、大学院重点化後の研究体制の整備、産学交流の推進などの重要な問題点が指摘された。

外部評価の内容から、本研究科・学部への期待感が高いと感じられる。指摘された事項を念頭に、二一世紀に向けてさらなる発展に努めることが、本研究科・学部の課せられた使命であろう。

第五章　二一世紀の発展に向けて――現状と展望――

第一節　カリキュラムと教官構成

一九九八（平成一〇）年に大学院重点化がなされ、現在、薬学研究科は生体分子薬学、創薬化学、医療薬学の三専攻、五大講座、一六分野、一協力講座（一分野）から成り、薬学部は一学科（総合薬学科）から成っている。現在実施中のカリキュラムとして、表2に薬学部専門科目の年次編成、表3に薬学研究科の授業科目を示す。また、表4に二〇〇〇（平成一二）年九月現在の教官配置を示す。二一世紀を臨み、生命科学、基礎薬学ならびに医療薬学の教育、研究体制の一層のレベルアップ、充実が期待される。さらに、国際化、情報化への対応、社会との連携、成果の社会還元なども考慮しての教育、研究活動が望まれる。

第二節　薬剤師教育、情報教育、生涯教育、体験入学、同窓会など

近年、薬剤師の新しい職務と役割が重要視され、それに対応して臨床薬学系カリキュラムの充実に努力し、表2

表2　薬学部専門科目カリキュラム編成

年次	基礎薬学	有機化学	生化学･物理化学	医療薬学	実習
1年	薬学概論Ⅰ 有機化学Ⅰ･Ⅱ 薬品分析化学Ⅰ 公衆衛生学				
2年	生物化学Ⅰ･Ⅱ･Ⅲ 有機化学Ⅲ 物理化学Ⅰ･Ⅱ 衛生化学 薬剤学Ⅰ 薬理学Ⅰ	薬品分析化学Ⅱ 有機化学Ⅳ･Ⅴ 生薬学 天然物化学Ⅰ	分子生物学Ⅰ 細胞生物学Ⅰ 微生物学 免疫学 放射化学	生理学Ⅰ･Ⅱ 薬剤学Ⅱ 解剖学	
3年	薬学英語 薬学概論Ⅱ 薬効検定学	天然物化学Ⅱ 有機合成化学Ⅰ･Ⅱ 有機反応論 生物有機化学 医薬品化学 有機構造分析	分子生物学Ⅱ 細胞生物学Ⅱ 生物物理化学 臨床生化学	薬理学Ⅱ･Ⅲ 薬物代謝学 臨床薬剤学 臨床薬理学 化学療法学 病理学	基礎化学実習 有機化学実習Ⅰ～Ⅳ 物理化学実習Ⅰ～Ⅲ 生物化学実習Ⅰ～Ⅴ ラジオアイソトープ実習
4年	薬制論			薬物療法学	病院実習
	卒業研究(特別研究実習･演習)				

表3　大学院薬学研究科カリキュラム編成

	生体分子薬学専攻	創薬化学専攻	医療薬学専攻	3専攻共通
必修科目	生体分子薬学演習Ⅰ 生体分子薬学演習Ⅱ 生体分子薬学特別研究Ⅰ 生体分子薬学特別研究Ⅱ	創薬化学演習Ⅰ 創薬化学演習Ⅱ 創薬化学特別研究Ⅰ 創薬化学特別研究Ⅱ	医療薬学演習Ⅰ 医療薬学演習Ⅱ 医療薬学特別研究Ⅰ 医療薬学特別研究Ⅱ	
選択科目	細胞分子薬学特論Ⅰ 細胞分子薬学特論Ⅱ 細胞分子薬学特論Ⅲ ゲノム機能学特論Ⅰ ゲノム機能学特論Ⅱ ゲノム機能学特論Ⅲ	創薬化学特論Ⅰ 創薬化学特論Ⅱ 創薬化学特論Ⅲ 機能分子設計学特論Ⅰ 機能分子設計学特論Ⅱ 機能分子設計学特論Ⅲ	医療薬学特論Ⅰ 医療薬学特論Ⅱ 医療薬学特論Ⅲ 医療薬学特論Ⅳ 臨床薬学特論 臨床薬学動態学特論 病院実習	機能動態学特論Ⅰ 機能動態学特論Ⅱ 分子薬学特論Ⅰ 分子薬学特論Ⅱ 病態薬理学特論

表4　薬学研究科教官配置表

（2000年9月1日現在）

専攻	講座	分野	教授	助教授，講師*
生体分子薬学	細胞分子薬学	生物物理化学	加茂直樹	宮内正二
		生化学	横沢英良	澤田均
		生体機能化学	五十嵐靖之	井ノ口仁一
	ゲノム機能学	構造生物学	稲垣冬彦	森岡弘志
		分子生物学	有賀寛芳	松本健一
				平敬宏
		神経科学		松岡一郎
				柏柳誠
創薬化学	創薬化学	天然物化学	小林淳一	森田博史
				繁森英幸
				小林優
		精密合成化学	森美和子	佐藤美洋*
		計算有機化学		濱田辰夫
		薬品製造化学	橋本俊一	中島誠
	機能分子設計学	衛生化学	長澤滋治	髙橋和彦
				山下俊之*
		薬化学	松田彰	周東智
				南川典昭*
医療薬学	医療薬学	薬理学	野村靖幸	大熊康修
		代謝分析学	鎌滝哲也	有吉範高
		薬剤分子設計学	原島秀吉	紙谷浩之
		臨床薬剤学	井関健	
	臨床薬物動態学［協力講座］	薬物動態解析学	宮崎勝巳	

薬学研究科附属薬用植物園	園長(併)教授	助教授(兼)
	小林淳一	小林優

に示すように臨床薬剤学、臨床薬理学、及び薬物療法学を開講している。一九九八（平成一〇）年、大学院重点化に伴い、本研究科に医療薬学専攻も設置された（表3、表4）。また臨床薬学コースも定員四名として、一九九七（平成九）年四月に開設、二〇〇〇（平成一二）年末までに、修士課程を六名が修了した。また、情報処理教育にも力を注いでいる。本学情報メディア教育研究総合センターの端末室（旧第三講義室）をつくり、二八台のコンピューターを設置している。学生は自由に電子メール、インターネットによって各種情報にアクセスできる。また、学部の薬効検定学の演習や、病院実習、さらに大学院の医療薬学特論Ⅲの演習に活用されている。図書も一層充実してきた。当研究科の一階図書室（二七三平方メートル）には、一九九九（平成一一）年度末現在、二万五七二冊（図書）、三八四種（雑誌）を在庫している。この年の図書・資料購入費は二九〇九万三〇〇〇円で総予算の九％を占めている。

「社会に開かれた大学」の一貫として、一九九九（平成一一）年三月に行った第一回生涯教育公開講座（講師二名の講演）に、一五七名の卒業生、一般市民が参加した。第二回は一九九九（平成一一）年十月、第三回は二〇〇〇（平成一二）年十一月に成功裡に開催された。高校生への当学部紹介のため教官の道内高校訪問（一九九四年より、毎年春～秋にかけ約一〇校の高校訪問）、体験入学（八月初旬の一日、一九九八年より二〇〇〇年の三年間で参加した高校生は延べ二五六名）、さらにオープン・ユニバーシティ（二〇〇〇年八月、研究室見学、教官や在学生との懇談）を行った。

毎年四月、教官、事務官、大学院生、薬学部一～四年生の参加の下、全学部的な新入生歓迎会が、また毎年六月には薬学祭（講演会や実験・展示など）が三年生の企画により行われている。教職員の親睦会も毎年七月と三月に行われ教官、事務官、技術職員の交流の場となっている。研究室単位のコンパ、旅行も盛んである。なお、テニスコートが教育研究棟の南側にあり、教職員、学生の利用に供されている。改修工事前までは、毎秋、研究棟南側グ

ランドで教室対抗のソフトボール大会が開催されていた。同窓会活動も活発で、本学部創立二〇周年をはじめ二五、三〇、三六、四〇周年を記念して、盛大な記念式、および懇親会が開かれた。また、会誌『芳香』を発行、二〇〇一（平成一三）年三月には第五〇号が刊行された。

第三節　二一世紀の薬学研究科

大学審議会は、二一世紀の大学像と今後の改革方策と題する答申書において、これからの大学院には、一、学術研究の高度化と優れた研究者の養成強化、二、高度専門職業人の養成強化を挙げている。薬学研究科の研究水準を高度化するためにも、萌芽的な研究を支援する体制を検討する必要がある。また、大学院教育にも全学共通講義が増える傾向にあり、薬学研究科独自の大学院教育の在り方を真剣に考える必要がある。また、高度職業人の養成と関連して、薬学教育六年制問題が再浮上してきた。高度の薬剤師教育を行う臨床薬学コースの教育体制の一層の強化と整備も重要な課題になろう。さらに、北キャンパスの再開発プランとして創成科学研究機構が評議会で承認され、この新研究機構への薬学研究科の参画も求められよう。さらには、大学法人化を契機とした全学的な研究組織の再編成という大きな変動も予想される。

二一世紀の薬学研究科を取り巻く環境変化に適切に対処するために、中長期計画の検討作業に着手する必要がある。

第六章　附属関連施設の動き――附属薬用植物園――

附属薬用植物園は、一九七六（昭和五一）年五月に文部省令により設置され、温室、薬草園、研究棟からなり、総面積六二〇〇平方メートル、保有標本は一二〇〇種になる（写真2）。特に寒地性重要生薬基原植物であるゲンチアナ・ルチア（リンドウ科）、漢民族の伝承薬のダイオウ（タデ科）等の試験栽培、加工調製研究及び茎頂点培養は高い評価を受けた。職員は教授（併任）、助教授（兼任）、臨時職員各一名、他に各分野代表による運営委員会によって運営されている。北海道は歴史的に見ても薬用植物の栽培には意欲的で、今から二五〇年前の松前藩時代にオタネニンジン、オウレン等が試作され、今日でも国産生薬の二〇％以上の産出を見ている。本施設は薬学部ならびに薬学研究科における生薬学、薬用植物学の教育研究に深く関わってきたが、他に寒冷地農業に貢献する研究も盛んに実施していた。近年、全国の薬用植物園、大学、国公立の研究機関からの北方圏の薬用植物に関する共同研究の申し出が急増している。なかでも厚生科学研究事業「ヒトゲノム・遺伝子治療研究

写真２　附属薬用植物園及び研究棟（2000年）

事業」薬用植物資源の分布調査とその活用では、北海道の野生当帰の分布と遺伝子レベルの分類調査研究は大きな成果を上げた。食生活の変化や社会の高齢化に伴い、種々の生活習慣病や加齢による疾病が急増し、大きな社会問題となっている。これらの疾病の予防や治療に有効な薬用植物への社会的関心が高まっており、当施設もこうした社会的要望にこたえる一般市民向けの様々な啓蒙活動も行っている。伝承薬の基原植物を保護すると共に、より有効な利用を考えるとき、薬用植物遺伝子を管理・保管することは、今後益々重要であり、施設としてもこれらの要求に対処する研究を展開中である。

あとがき

薬学部局史は次のように分担執筆した。

第一章第一節と二節は吉沢逸雄、高田昌彦、青木勇、第三節は長澤滋治、第二章と第三章第一節は森美和子、第二節は鎌滝哲也、第三節は長澤滋治、第四章第一節は横沢英良、第二節は鎌滝哲也、第三節は横沢英良、第五章第一節と二節は野村靖幸、第三節は長澤滋治、第六章は小林淳一。なお、野村が連絡と調整にあたった。

最後に、第一章第一節〜二節の執筆を担った吉沢逸雄氏（北海道薬科大学）、高田昌彦氏（札幌医療福祉専門学校）、青木勇氏（北大薬学部元職員）、ならびに各種資料の収集にご協力された薬学研究科・薬学部事務部の各位に深く感謝するものである。

（野村靖幸）

年表

一九五四（昭29）
4・1　北海道大学医学部に薬学科新設、薬化学講座を設置

一九五五（昭30）
7・1　薬品分析化学講座及び生薬学講座を設置

一九五六（昭31）
4・1　薬品製造学講座及び衛生化学講座を設置

一九五八（昭33）
3・25　薬学科第一期生卒業
3・31　薬剤学講座及び薬効学講座を設置
3・31　薬学研究科新設、薬学専攻を設置

一九五九（昭34）
11・1　薬用温室（七六平方メートル）新築落成

一九六一（昭36）
7・18　札幌において日本薬学会第八一年会を開催（～7・21）

一九六三（昭38）
4・1　ベックマン分光光度計及び赤外分光光度計研究室が北海道大学共同利用施設となる

一九六五（昭40）
3・31　薬学部設置
3・31　薬学科・製薬化学科を設置
3・31　薬学科に薬化学・薬品分析化学・生薬学・薬品製造学・衛生化学・薬剤学・薬効学の七講座を設置
4・1　医学部長安倍三史教授薬学部長事務取扱就任
5・1　赤木滿洲雄教授薬学部長就任
6・16　薬学部規程制定

一九六六（昭41）
4・5　製薬化学科に薬品合成化学講座及び薬品有機化学講座を設置
7・1　伴義雄教授薬学部長就任
10・14　薬学部本館工事起工

一九六七（昭42）
3・26　薬学部本館一期工事（四一二八平方メートル）新築落成
4・1　製薬化学科に微生物薬品化学・薬品生物化学講座を設置
4・1　RI実験室（二一三平方メートル）新築落成
12・20　薬用温室移築工事落成

一九六八（昭43）
3・19　薬学部本館二期工事（四万三平方メートル）増築落成
3・20　RI実験室（一〇〇平方メートル）増築落成
6・12　製薬化学科に植物薬品化学・薬品物理化学講座を設置
11・20　薬用温室（四七平方メートル）増築落成

一九六九（昭44）
4・1　薬学研究科に製薬化学専攻を設置

一九七〇（昭45）

7・1　水野義久教授薬学部長就任

7・28　札幌において日本薬学会第九〇年会を開催（～7・30）

一九七二（昭47）

11・25　薬品庫（五二平方メートル）新築落成

一九七三（昭48）

6・19　薬学部において一九七三年度全国国公立大学薬学部科長会議を開催

7・1　木村道也教授薬学部長就任

一九七四（昭49）

11・2　創立二〇周年記念祝賀会開催

一九七五（昭50）

7・1　石井信一教授薬学部長就任

一九七六（昭51）

2・3　薬用植物実験室（一六一平方メートル）新築落成

3・19　元素分析施設が北海道大学共同利用施設となる

5・10　附属教育研究施設として薬用植物園を設置

一九七七（昭52）

10・24　病態動物管理センター新築工事着工

一九七八（昭53）

7・1　伴義雄教授薬学部長就任

一九七九（昭54）

1・22　北海道大学機器分析センターが学内共同教育研究施設となる

8・28　札幌において日本薬学会第九九年会を開催（～8・30）

一九八一（昭56）

7・1　上田亨教授薬学部長就任

一九八四（昭59）

11・24　薬学部創立三〇周年記念行事開催

一九八五（昭60）

7・1　小山次郎教授薬学部長就任

一九八七（昭62）

2・2　カナダアルバータ大学薬学部長本学部訪問

7・1　金岡祐一教授薬学部長就任

一九八八（昭63）

6・10　アルバータ大学薬学部との覚書を締結

一九八九（昭64、平1）

7・1　米光宰教授薬学部長就任

一九九〇（平2）

8・21　札幌において日本薬学会第一一〇年会を開催（～8・23）

一九九二（平4）

4・1　薬学科及び製薬化学科を総合薬学科に改組

4・10　総合薬学科に薬化学・生薬学・薬品製造学・精密合成化学・遺伝子有機化学・生物物理化学・薬品生物化学・薬品分子生物学・生体機能化学・生体分子構造学・薬効学・衛生化学・代謝分析学・薬剤学の一四講座を設置

一九九三（平5）

7・1　栗原堅三教授薬学部長就任

一九九四（平6）

11・26　薬学部創立四〇周年記念行事開催

12・11　第一回推薦入学試験実施

一九九六（平8）

6・30　動物舎（四五二平方メートル）新築落成

一九九七（平9）

7・1　長澤滋治教授薬学部長就任

10・20　薬学部庁舎大型改修工事終了

一九九八（平10）

3・4　第一回生涯教育公開講座開催

4・1　薬学部が大学院重点化により改組

4・1　長澤滋治教授研究科長就任

8・23　第一回体験入学

二〇〇〇（平12）

8・7　第一回オープン・ユニバーシティ（〜8・8）

二〇〇一（平13）

3・28　札幌において日本薬学会第一二一年会を開催（〜3・30）